HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | 大学生等の依頼表現の変化 |
| 著者 | 丸島，歩；MARUSHIMA，Ayumi |
| 引用 | 北海学園大学人文論集(71)：37-52 |
| 発行日 | 2021-08-31 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

# 大学生等の依頼表現の変化

丸　島　　歩

## 1．はじめに

ナカミズ（1992）では日本語母語話者（大学生）と日本語学習者（留学生）の学校場面における日本語での依頼表現について調査を行っている。ナカミズ（1992）での主旨は非母語話者の表現を母語話者と比較することであったが，論文が発表されてからすでに30年近く経過しており，母語話者の言語使用に変化が起きている可能性があると考えた。本論文は現在の大学生等の依頼表現について行った調査結果を分析し，ナカミズ（1992）と比較したものである。

## 2．先行研究

日本語の依頼表現についての研究は，母語話者の表現を相手との関係や依頼の負担度と関連付けて分析したものと，日本語学習者の中間言語分析や日本語教育への応用を見据えて学習者の依頼表現と比較するものとに大別できる。

岡本（1986）では男子大学生を対象に，同性で同学年の親しい人と疎遠な人に6つの依頼の場面でどのような表現を用いるかを質問紙形式で調査を行っている。親しい相手には「－て［よ］」「－てくれ［よ］」等の依頼型，疎遠な相手には「－てくれ（る，ない）［か］」「－てもらえ（る，ない）［か］」等の意向打診型が特に多く用いられていた。また，疎遠な相手に対してより敬語を伴った表現が多かった。依頼型より意向打診型のほうが意味的に間接性を持っており，疎遠な相手にはより間接的な表現が用いられると言

える。さらに岡本（1986）では依頼された相手のコストの高さを含めた実験課題を，口頭での回答による調査で行っている。コストが低いほど依頼型が，高いほど意向打診型が用いられる傾向があった。また，コストが低い方が依頼の際の文節が短い傾向も見られた。

高村（2013）では，大学生と大学院生を対象にアンケートを行い依頼内容の負担度にも注目して分析を行っている。その結果，負担度が大きいほど「もらう型」の割合が大きくなった。この傾向を高村は，「もらう」のガ格は依頼者であるため，「相手が自分に対して何かをしてくれるという意識よりも自分が何かをしてもらうという意識がより強く」なるのではないかと述べている。さらに，負担がおおきいと「否定型」を用いる割合が大きくなるという。高村はこの理由を「相手が依頼を断りやすくなる」「依頼者の腰が低いという印象を受ける」と説明している。また，負担が小さくても女性は男性に比べて「もらう型」を多く用いるといい，これを「「女らしさ」に含まれていた気遣い・繊細さを表現するため」と説明している。さらに「～してもらってもいい（かな）／もらうことってできる（かな）」「～してほしいんだけど＋$\alpha$」のような非常に婉曲的な表現を多く使うという結果が得られている。

平川ほか（2012）では，相手にものごとを頼む際の表現を要求表現として，ポライトネス理論に立脚して要求表現の使い分けに及ぼす社会的距離，社会的地位，要求量の3要因が与える影響について大学生を対象に質問紙を用いた場面想定法による実験を行っている。その際，丁寧度と間接度を区別して分析を行っている。その結果，3要因の認知が高まると丁寧な表現が使用されたが，間接度には影響を及ぼさなかった。

日本語教育への応用を目指したものとしては金（2000）などがある。金（2000）では，授受補助動詞である「～てくれる／くださる」「～てもらう／いただく」に焦点を当て，東京か東京周辺に住む日本語母語話者300名にアンケート調査を行っている。その結果，聞き手が家族の場合は「くれる型」がもっとも多く用いられた。聞き手が家族以外の場合は，中学生と友人は「くれる型」，先輩と先生は「いただく型」がもっとも多かった。

槌田（2003）では，日本人学生と韓国人留学生の依頼の談話ストラテジーを語用論的ポライトネスの観点から比較している。日本人学生は「前置き」を難しい依頼内容の場合や目上に対して使用しているのに対し，韓国人留学生は目上にしか使用していなかった。また文末表現については，日本人学生は目上に対しては「言いさし[1]」を，同級生相手には「言い切り」を使用しているのに対し，韓国人留学生は易しい依頼内容の場合と相手が同級生の場合に用いており，日本人学生よりも「言いさし」の使用率が少ないという違いが見られた。

和田ほか（2010）では，日本語母語話者，中国語母語話者，韓国語母語話者の大学生・大学院生，日本語学習者は上級者に限定して，依頼用件の負担度，親疎関係，上下関係の因子を組み合わせた談話完成テストを用いて調査分析が行われた。分析は特に前置き表現を中心に行われている。中国語母語話者は日本語の依頼で「すみませんが」や「すみませんが，よかったら～」という前置きを多用しており，これは中国語での「如果的方便的話」にあたる表現で，言語語用論的転移であると指摘している。韓国語母語話者も日本語の表現では本題のまえに「すみませんが」を多く用いている傾向が見られた。これも韓国語による依頼表現をそのまま日本語に置き換えたものであると考えられる。

昨今の新しい言語行動に含まれる依頼表現としては，携帯メールを扱った大坂（2014）などがある。4年制大学の学生99名に対して，自己主張場面として3つの場面を設定した質問紙調査を行っている。場面の一つとしてアルバイトのシフト交代の依頼が含まれている。正当性が低い条件のほうが高い条件より，女性のほうが男性より有意に文字数が多かった。また，正当性が低い条件のほうが高い条件より有意に謝罪の回数が多かった。

本稿で比較対象とするナカミズ（1992）も母語話者と学習者である留学生の日本語での依頼表現を明らかにしたものである。ナカミズ（1992）では中国人，韓国人，アメリカ人の日本語学習者と日本人大学生に質問用紙

---

[1] 文末を言い切らない中途終了発話のことである。

を用いて親疎関係，聞き手が目上か同列か，依頼の負担に分けて6つの場面を用意し，どのように依頼するかを問うている。質問紙で得られた回答内容を確認するために，口頭で質問する場合もあった。結果から依頼の発話行為全体の枠組みを示したうえで，依頼表現そのものの言語形式の分析も行っている。「V＋たい形」「V＋ほしい」などの「願望表現」，「……わけにはいかない」「V＋いただけない」などの「聞き手の都合を聞く表現」，「V＋ください」などの「直接的依頼表現」が観察された。この中では「聞き手の都合を聞く表現」が多く「願望表現」は少なかったが，日本人学生も留学生も聞き手が目上，特に負担が軽い依頼の場合には「願望表現」が比較的多く使われていた。また，日本人学生は親しい同等の相手に軽い依頼をする場合には「くれる」の否定形を用い，親しくない同等の相手にはより丁寧度が高いと考えられる「もらえる」の否定形が用いられていた。相手が親しい同等の者でも以来の負担が重い場合は「もらえる」の否定形が多く用いられていた。留学生の場合はこの親疎や依頼の負担の重さを「くれる」の否定形から「もらえる」の否定形への切り替えではなく，常体から丁寧体への切り替えで行っていた。さらに，聞き手が同等の相手には「くれる」「もらえる」の否定形が多く用いられていたが，それに「(か) なぁ」「(か) しら」がついている場合があった[2]。

## 3．方法

ナカミズ（1992）では依頼する相手を親しいクラスメート，親しくないクラスメート，親しい教員，親しくない教員の4パターン，計6場面を設定して調査を行っている。本研究ではまず，ナカミズ（1992）と同様の項目で数名の大学生を対象に予備調査を行った。その結果ナカミズ（1992）とは異なり，立場が同等であるクラスメートに依頼する際にはLINE等のコミュニケーションアプリを用いることが多いというコメントが得られた。

---

[2] これらの表現をナカミズ（1992）では「ぼかし表現」としていた。

そこで，本調査では6場面のうちクラスメートを相手として設定をしている3場面を口頭の場合とLINE等の場合に分割し，計9場面で行うことにした。調査はオンラインアンケートサービスGoogle formを利用し，対象者は日本国内の大学・短期大学・専門学校に通う学生とした。回答の前に通っている学校の所在地[3]と性別，生年月を回答してもらった。調査項目を表1にまとめる。なお，回答は全て自由記述とし，口頭場面については「直接会って頼む場合，どのような行動をしてどのように言うか，セリフも含めてできるだけ具体的に答えてください。」，LINE等で依頼する場面では「LINE，WeChat，KakaoTalk等を使って頼む場合，どのようなメッセージを送るか，できるだけ具体的に答えてください。絵文字を使う場合は文字化けのおそれがあるので，「[4](汗)」「[5](笑顔)」のように絵文字のあとにかっこ書きで絵文字の意味を添えてください。」のような説明を加えた[6]。

## 4．結果

回答者は41名で，全員が日本人学生であった。そのうち39名は北海道の大学に通う大学生であった。男性15名女性25名で[7]，1名を除いて1998～2001年の生まれで回答時の年齢は18～22歳であった。依頼表現そのものについてはほとんどの回答者が述べていたが，その前後の言動について何をどの程度記述するかについてはかなりの個人差があった。そこで本稿では依頼表現そのものに焦点をしぼって分析することとする。

---

[3] 地域性を考慮する場合に言語形成期を過ごした場所をデータとすることが多いが，項目が大学等での場面に限定されているため，言語形成期よりも学校の所在地が重要であると考えた。

[4] 実際には丸括弧の前に汗をかいていることを示す絵文字が表示されている。

[5] 実際には丸括弧の前に笑顔の絵文字が表示されている。

[6] 本調査ではオンラインで行ったこともあり，あらかじめ詳細な指示が必要であると考え，このような説明を付すこととした。

[7] 性別について「答えたくない」と回答した回答者が1名いた。

**表1：調査項目一覧**

<table>
<tr><th>場面</th><th>質問項目</th><th>口頭／LINE等</th><th>同等／目上</th><th>親疎</th><th>頼みやすさ</th></tr>
<tr><td>場面①A</td><td rowspan="2">あなたは昨日気分が悪かったので，大学の講義を休みました。その講義のノートを親しい日本人のクラスメートに貸してもらうように頼みたいと思っています。その時にあなたはどうしますか。</td><td>口頭</td><td rowspan="4">同等</td><td rowspan="2">親しい</td><td rowspan="4">頼みやすい</td></tr>
<tr><td>場面①B</td><td>LINE等</td></tr>
<tr><td>場面②A</td><td rowspan="2">あなたは昨日気分が悪かったので，大学の講義を休みました。その講義のノートを親しくない日本人のクラスメートに貸してもらうように頼みたいと思っています。その時にあなたはどうしますか。</td><td>口頭</td><td rowspan="2">親しくない</td></tr>
<tr><td>場面②B</td><td>LINE等</td></tr>
<tr><td>場面③</td><td>明日あなたは大学の授業で発表する予定でしたが，週末に友達があなたのところに遊びにきたため，発表の準備ができませんでした。そこで，発表の日を延期してもらうように先生に頼みたいと思っています。その授業の先生はあなたとあまり親しくない日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか。</td><td>口頭</td><td rowspan="4">目上</td><td>親しくない</td><td rowspan="2">頼みにくい</td></tr>
<tr><td>場面④</td><td>明日あなたは大学の授業で発表する予定でしたが，週末に友達があなたのところに遊びにきたため，発表の準備ができませんでした。そこで，発表の日を延期してもらうように先生に頼みたいと思っています。その授業の先生はあなたと親しくしている日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか。</td><td>口頭</td><td>親しい</td></tr>
<tr><td>場面⑤</td><td>大学のレポートを書くためにあなたの先生の部屋にある本を貸してもらうように先生に頼みたいと思っています。その先生はあなたと親しくしている日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか。</td><td>口頭</td><td>親しい</td><td>頼みやすい</td></tr>
<tr><td>場面⑥A</td><td rowspan="2">あなたはひどい風邪をひき，2週間入院することになりました。少し前に旅行をした時，お金を使いすぎたので，今入院費を払うお金を持っていません。親しい大学の友達に5万円貸してもらうように頼みたいと思っています(1カ月後お金を返すと約束する)。その時にあなたはどうしますか。</td><td>口頭</td><td rowspan="2">同等</td><td rowspan="2">親しい</td><td rowspan="2">頼みにくい</td></tr>
<tr><td>場面⑥B</td><td>LINE等</td></tr>
</table>

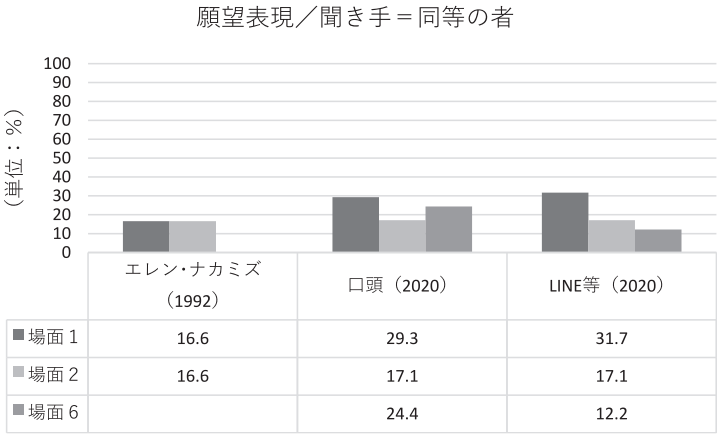



**図１：願望表現／聞き手＝同等の者**

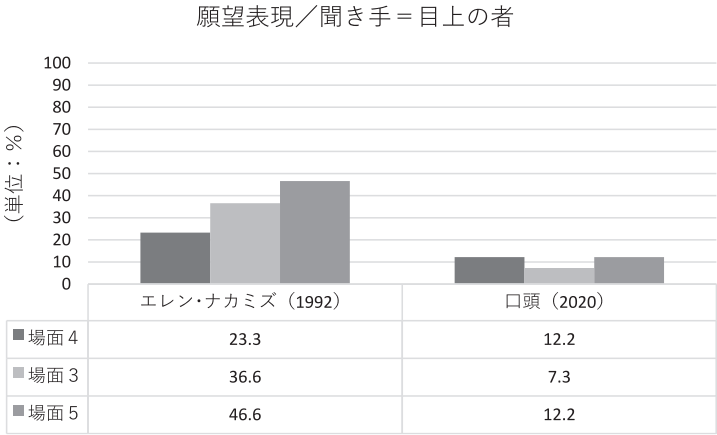



**図２：願望表現／聞き手＝目上の者**

まず，願望表現の使用について比較したい。ナカミズ（1992）では依頼の際に目上相手に願望表現を用いることが多かったが，本調査では同等の者相手の場合の方が願望表現をよく用いる傾向があった(図１，２)。また，ナカミズ（1992）では親しい教員に軽い依頼をする場合（場面５）で特に願望表現が多く使われており，依頼の内容が願望表現の使用に影響を与え

ていることが見受けられる。本調査では同等の相手でも親しい相手に願望表現をより多く使う傾向があった。ただし頼みにくい内容（場面６）のLINE等での依頼の場合は願望表現が使われる傾向が少なかった。願望表現を使用するか否かの選択は，親疎や依頼内容だけでなく，コミュニケーションの方法にも影響を受けていることがわかる。

次に，「クレナイ」形と「モラエナイ」形，常体と丁寧体の使用状況を見ることとする。ナカミズ（1992）同様，本調査でも親しくないクラスメート（場面２）や頼みにくい依頼（場面６）では「クレナイ」より「モラエナイ」を使う割合が高くなった。この割合には口頭かLINEのようなテキストベースでの依頼かはあまり影響がないと思われる（図３～８）。ただし，重い依頼（場面６）においてはLINE等では「くれない」の割合がやや高くなっている。ナカミズ（1992）では親しいクラスメートには常に常体を用いるが，本調査では親しいクラスメートでも丁寧体を使うケースが見られた。口頭よりLINE等での場合に，親しいクラスメートより親しくないクラスメートの場合に，軽い依頼より重い依頼の場合に，それぞれ丁寧体が用いられる割合が高くなっている。

次に，文末の和らげ表現についての比較を行う。ナカミズ（1992）ではクラスメートに依頼をする場合に終助詞「（か）なぁ」「（か）しら」を使うケースが見られたが，本調査では少なかった（図９）。特に「かしら」は全く観察されなかった。ナカミズ（1992）では親しくないクラスメート（場面２）や重い依頼（場面６）で特によく使われる傾向があり，頼みにくい場合にこのような表現が多用されると結論付けている。本調査では口頭では同様の傾向が見られるが，LINE等では親しくないクラスメート（場面２）での使用頻度は低く，単純に頼みやすさと相関しているわけではないと考えられる。本調査では「～（もらえ）たりする？」「～ことってできる／可能？」など，ナカミズ（2020）とは異なる和らげ表現が散見された。

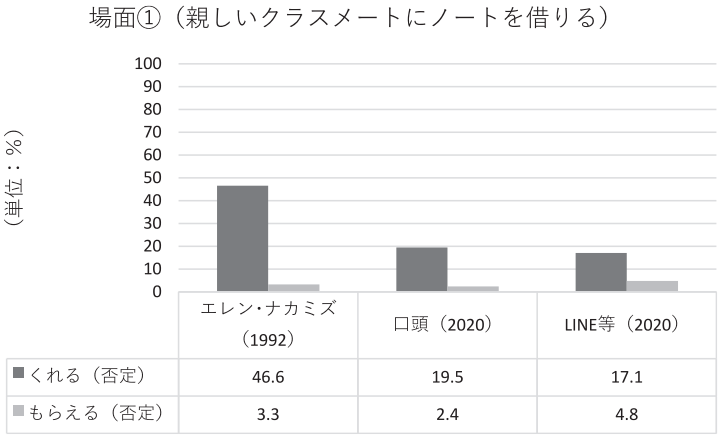



**図 3：「くれる」「もらえる」の否定形（場面①）**

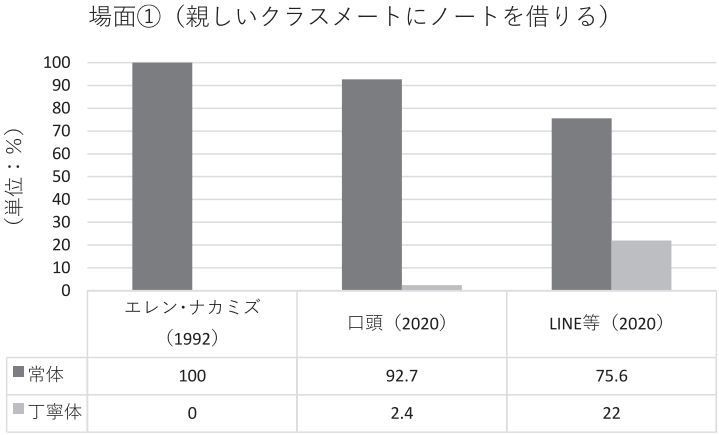
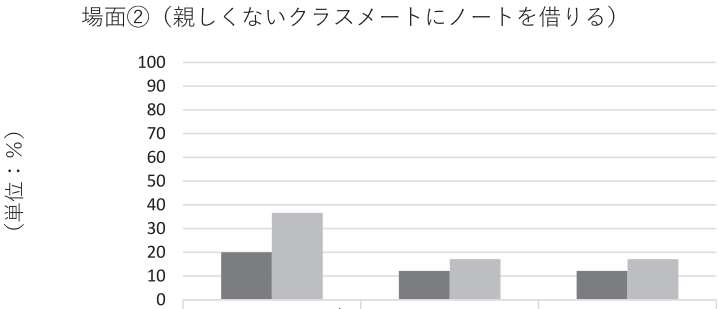


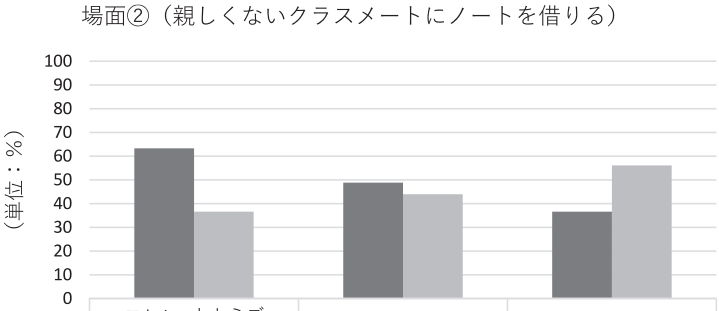

**図 4：「常体」「丁寧体[8]」（場面①）**

8　本調査で丁寧体と常体の合計が 100％にならないのは，具体的な依頼表現について明記していない回答も含まれているためである。



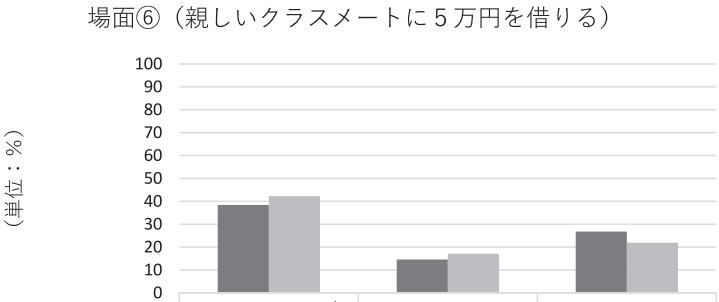

| | エレン・ナカミズ（1992） | 口頭（2020） | LINE等（2020） |
|---|---|---|---|
| くれる（否定） | 20 | 12.2 | 12.2 |
| もらえる（否定） | 36.6 | 17.1 | 17.1 |

**図 5：「くれる」「もらえる」の否定形（場面②）**



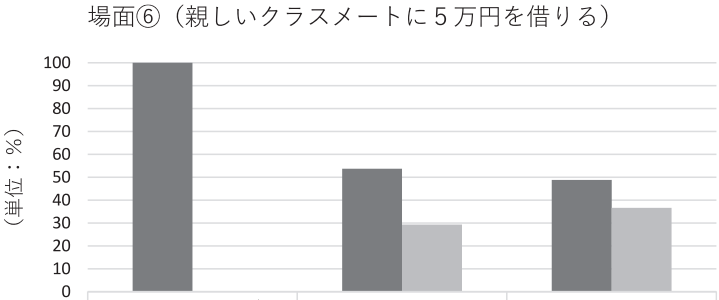

| | エレン・ナカミズ（1992） | 口頭（2020） | LINE等（2020） |
|---|---|---|---|
| 常体 | 63.3 | 48.8 | 36.6 |
| 丁寧体 | 36.6 | 43.9 | 56.1 |

**図 6：「常体」「丁寧体」（場面②）**




| | エレン・ナカミズ（1992） | 口頭（2020） | LINE等（2020） |
|---|---|---|---|
| くれる（否定） | 38.4 | 14.6 | 26.8 |
| もらえる（否定） | 42.3 | 17.1 | 21.9 |

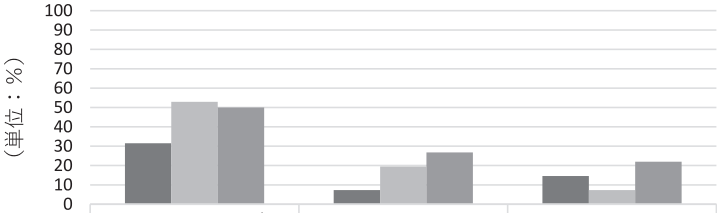
**図７：「くれる」「もらえる」の否定形（場面⑥）**




| | エレン・ナカミズ（1992） | 口頭（2020） | LINE等（2020） |
|---|---|---|---|
| 常体 | 100 | 53.7 | 48.8 |
| 丁寧体 | 0 | 29.3 | 36.6 |

**図８：「常体」「丁寧体」（場面⑥）**

（か）なぁ、（か）しら




| | エレン・ナカミズ（1992） | 口頭（2020） | LINE等（2020） |
|---|---|---|---|
| 場面 1 | 31.5 | 7.3 | 14.6 |
| 場面 2 | 52.9 | 19.5 | 7.3 |
| 場面 6 | 50 | 26.8 | 22 |

**図 9：「（か）なぁ」「（か）しら」**

## 5．考察

ナカミズ（1992）と比較すると，まず大きく異なる点は親しいクラスメートに対する丁寧体の使用の有無である。ナカミズ（1992）では親しいクラスメートに対しては，全く丁寧体が用いられていない。これに対し 2020 年の本調査では，相手が親しいクラスメートであっても丁寧体が用いられる場合があった。特に頼みにくい依頼については 30～40％ほどが丁寧体を用いるという結果が得られた。また多くはないものの，頼みやすい依頼であっても丁寧体を用いるという回答があった。そして，口頭より LINE 等で依頼した場合により丁寧体が用いられやすい傾向が見られた。これは音声言語と文字言語の違いであり，文字言語のほうがより丁重な表現が好まれるためだと推測できる。LINE のような文字言語で即時的に多彩なやり取りができるツールは，1992 年の時点では普及していなかった。このようなメッセンジャーアプリの登場で，大学生の言語生活も大きく変化したと言えるだろう。

丁寧体の使用については，親しくないクラスメートであってもナカミズ（1992）より本調査のほうが，その割合が高かった。特に LINE での依頼で

は，半数以上が丁寧体を用いると回答した。口頭でのコミュニケーションに限って比較しても，より丁寧な依頼表現が好まれるようになったと推測できる。

また，依頼表現の形式は本調査とナカミズ（1992）では大きく異なった。ナカミズ（1992）では「～タイ」「～テホシイ」などの願望表現が現れる割合が高かったが，本調査では願望表現の出現は少なかった。また，ナカミズ（1992）では目上相手に願望表現が用いられるケースが多いが，本調査では同等の者相手に用いられる場合のほうが，その割合が高かった。

さらにナカミズ（1992）では同等の相手に依頼する際の相手の親疎関係や依頼の重さが「クレナイ」と「モラエナイ」の区別で説明できる部分が大きかったが，本調査ではそもそも「クレナイ」「モラエナイ」を用いた割合がそれほど高くなかった。「モラエナイ」については，相手が親しくない場合や重い依頼など，より頼みにくい場面で用いられやすいという傾向は比較的一致している。本調査では多数派を占める表現が現れづらく，依頼表現のバリエーションがより多様化していると考えられる。

ナカミズ（1992）では，「（か）なぁ」「（か）しら」が「ぼかし表現」として挙げられていた。終助詞の「かな」「かしら」の基本的な意味は「自問」であり，語用論的には相手に問いかける場合にも用いられるが，応答の要求性は強くない（任 2006）。この要求性の弱さが依頼表現での和らげとして機能していると言えるだろう。本調査では「かしら」は全く出現しなかった。「かしら」は女性語，「かな」は男性語とされることが多いが，任（2006）は「場面的にも文法的にも「かしら」を使いうる環境があるにもかかわらず実際の使用が少ないということは非常に興味深いことである。「かしら」は女性性の強い表現形式とされるが，日常の生活では，「かしら」を使いうる状況であっても，「かな」を使用するのである」と述べており，「かしら」が役割語的に機能することがあると指摘している。現在の若年層においてはほとんど「かしら」は用いられないと考えて良いだろう。では性別を問わず「かな」を用いるようになったかと言えば，本調査では「かな」の出現も多くなかった。それ以外の和らげの機能を有すると考えられる表現と

して「～(てもらえ）たりする？」「～ことってできる／可能？」等，ナカミズ（1992）で言及されていない形が散見された。現在の若年層においては,「かな」の使用は少なくとも依頼における和らげの機能としては限定的になり，新しい表現にとって代わられつつあると言えるだろう。

## 6．展望

以上のように，ナカミズ（1992）と本調査で日本語母語話者の学生の依頼表現にさまざまな相違点があることが観察された。親しい友人間でも丁寧語を用いるようになったり，依頼の際に願望の表現があまり用いられなくなっているといった言語形式の変化も大きいが，この30年近くの間でモバイルデバイスが普及したこともあり，そもそも若年層のコミュニケーションの方略は大きく変化していると考えられる。その証左として，口頭で依頼をする場合の設問でも「LINEか電話で連絡する」と回答しているものが散見された。また，場面⑥のように非常に負担の重い依頼についての設問では「友人に借りず親に相談する」のようにそもそも友人に頼らないという回答も見られた。ナカミズ（1992）でそのような「直接口頭では頼まない」「友人には頼まない」という回答がどのくらいあったかは示されていないが，この30年で友人関係やそのコミュニケーションの手段が大きく変化している可能性も考えられるだろう。

また，世代差だけではなく地域差の影響がある可能性も考慮しなければならないと考える。本調査での回答者はほとんどが北海道の大学等に通う学生であったが，ナカミズ（1992）では回答者の出身地や居住地は示されていない[9]。両者の地域的な差異が大きいかどうかはわからないが，地域差が依頼表現やその発話行為にどの程度影響したかについては，現在の若

[9] 「V＋もらわれへん」「V＋くれへん」など関西方言での例が挙げられていること，筆者が論文発表当時，大阪大学大学院の大学院生であったことから，大阪やその周辺に居住する学生に対して調査が行われた可能性が高い。

年層の依頼表現にどのような地域差があるかについての調査が必要だろう。今後の研究の進展が望まれる。

日本語の発話行為の研究は先行研究の項で述べたとおり，日本語教育を見据えて行われるものも多い。若年層のコミュニケーションの方略の時間的変化が激しいことに鑑みれば，ナカミズ（1992）のような母語話者と非母語話者の比較研究を，そのまま教育に援用するのは必ずしも望ましいとは言い切れない。これらの基礎研究の知見のどの部分を教育に活用するかは慎重な検討が必要であるとともに，若年層の発話行為に関する研究が引き続き盛んに行われることを期待したい。

## 謝辞

本論文は，2021 年 3 月に行われた第 45 回日本社会言語科学会研究大会でのポスター発表をもとに加筆・修正したものである。発表時にコメントやアドバイスをくださった方々に御礼申し上げる。また，筆者が 2020 年度に北海学園大学で担当した人文学部日本文化学科 3 年生対象のゼミナール「日本文化専門演習Ⅰ」内で調査項目の検討を行った。大学生の言語行動について積極的に意見を述べたり，回答への呼びかけを行ったりしてくれたゼミ生達に感謝を述べたい。

## 参考文献

エレン・ナカミズ（1992）「日本語学習者における依頼表現 ── ストラテジーの使い分けを中心として ──」『待兼山論叢　日本学篇』26，49-69.

大坂綾（2014）「正当性の文脈が携帯メールによる自己主張方略に及ぼす影響」『北星学園大学大学院論集』 5，115-127.

岡本真一郎（1986）「依頼の言語的スタイル」『実験社会心理学研究』26（1），47-56.

金昌男（2000）「日本語母語話者における依頼表現の使用実態について ──「～てくれる／くださる」「～てもらう／いただく」を中心に ──」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 3，30-43.

高村英里奈（2013）「依頼表現について ── 文末表現の焦点を当てて ──」『東京女子大学言語文化研究』22，39-51.

槌田和美 (2003)「日本人学生と韓国人留学生における依頼の談話ストラテジー使い分けの分析 ── 語用論的ポライトネスの側面から ──」『小出記念日本語教育研究会論文集』11，41-54.

任利（2006)「「かしら」「かな」における性差の史的変遷」『筑波日本語研究』11，47-66.

平川真・深田博己・樋口匡貴（2012)「要求表現の使い分けの規定因とその影響課程 ── ポライトネス理論に基づく検討 ──」『実験社会心理学研究』52-1，15-24.

和田由里恵・堀江薫・吉本啓（2010)「依頼表現における日本語学習者の中間言語 ── 中国語母語話者・韓国語母語話者の母語転移」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 5，171-177.